

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520919

研究課題名(和文) 都市江戸の貿易陶磁器需要と地域間貿易ネットワークに関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study on trade-ceramics demand at the Edo-city and the inter-regional trade network

研究代表者

堀内 秀樹 (HORIUCHI, HIDEKI)

東京大学・キャンパス計画室・准教授

研究者番号：30173628

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：江戸では、17世紀肥前磁器が普及する前に日常使用する陶磁器と大名家を中心に武家儀礼用としての揃いの食膳具や茶陶が多く出土することが確認された。これら需要の背景と変化が茶会記、御成、蔵帳などの調査研究により、復元された。また、18世紀後葉以降では、武家のみならず町人地からも規格性の高い貿易陶磁器が出土するようになり、肥前磁器が需要を充足する中、貿易陶磁器の用途が中国趣味を背景とした煎じ茶習慣の普及とともに拡大していく状況が看取された。これらは既成の身分階層とは別に文人趣味と評価される趣味や指向が共通するグループが作るサロンのな粋組みの中で需要されると推定される。

研究成果の概要(英文)：Before the 17th century, Hizen porcelain became popular, ceramics for daily use and the ceramics for the tea-ceremony and tableware set of samurai ritual is excavated in large quantities in Edo-site. The change and the background of the demand could be restored by research of Chakaiki, Onari and Kuracho.

And in the latter half of the 18th century, high standard trade ceramics is to be excavated from the site townspeople as well as samurai. While Hizen porcelain to satisfy the demand, the use of trade ceramics began to expand with the spread of tea, Senjicha, against the background of China-oriented. By people that are different from the existing hierarchy, the trade ceramics has expanded with the spread of Sencha habits, against the background of China-oriented.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学 貿易陶磁器 江戸 需要

1. 研究開始当初の背景

これまで日本の当該期の貿易陶磁器研究は、二つの大きな流れがあった。ひとつは肥前陶磁器の議論である。海外の消費遺跡の調査なども踏まえ貿易陶磁器肥前陶磁における研究成果は、高く評価できる。もうひとつは、東アジア各地の発掘調査の出土状況とその変遷から歴史的・政治的背景などについて個々の地域をベースとした研究が展開している。

東アジアの中での日本の地理的位置は、東あるいは北に大きな市場が存在しないいわば終極地にあたり、こうした環境は消費や需要を考える上で中継地としてのパイアスを排除できるメリットを有する。その中で江戸は、將軍の拠点、大名の活動拠点として行われる武士の消費活動に伴って、多くの金銭が投下される市場として、経済規模や消費様態において他にはない特異性を有する。

貿易陶磁器は特定の文化や社会・経済的な行為の中で象徴的な道具として位置づけられるアイテムであり、その需要は、当該期の日本の政治・社会的制度や文化的指向、経済的動態などと連動していると考えている。

2. 研究の目的

本調査・研究は、16世紀のヨーロッパ勢力参入、17世紀の中国の王朝交代、この間の日本の金銀銅などの鉱物資源の増加などによって新たな段階に入った東アジア陶磁器貿易を、日本を含めた東アジア貿易ネットワークの再編と変容のプロセスについての解明と言う視点から、日本 - 特に近世日本の象徴的な消費都市江戸 - における消費動態を究明することを目的とする。

3. 研究の方法

江戸時代における支配階層である武家の拠点江戸は、徳川將軍家をはじめ各大名の活動拠点でもある。江戸の調査・データ化

に基づいた方向性は本研究の中心であり、日本の需要復元の鍵になると考えている。

調査は、伝世資料では得られない地域・年代・階層などの情報を有する考古学的資料を対象にし、詳細なデータを呈示した上で貿易陶磁器需要の実態を明らかにする。

需要の傾向を踏まえた上で、想定される需要の関連する経済的動態や文化的行為などについて考察を加える。

(1) 江戸遺跡の調査

既報告の遺跡に対して、報告書に掲載されている資料と報告書に非掲載の資料とがあると考えられる。本調査では、その両者を対象にして行った。

報告書集成調査

集成した資料は、2009年度までに調査報告書が刊行されたおおむね江戸朱引線内の遺跡のうち、江戸期に最終廃絶時期が想定される遺跡・遺構を対象に報告書に掲載されている全ての貿易陶磁器について行った。データ化は、器種、推定生産地、装飾法、法量、銘款など陶磁器個々の情報の他に、出土遺跡や遺構の性格、廃絶要因、共伴している陶磁器の年代などの情報についても合わせて行った。

集成は研究協力者に分担していただき、集成された貿易陶磁器は、4,650点に及んだ。

収蔵庫調査

既報告の遺跡においても、小破片で報告されなかった貿易陶磁器も存在する。需要の復元を指向した場合、それが出土 (= 所有・使用) していたかの確認は重要である。こうした視点から、報告書で比較的多くの貿易陶磁器が出土している遺構や層を抽出し、報告外の資料の観察と写真撮影によるデータ化を行った。調査は、代表者堀内、研究協力者の長佐古真也、武内啓、藤掛泰尚、宮澤菜穂が中心に行った。

(2) 江戸遺跡の理解の為の調査

蔵帳

研究代表者(堀内)が『加賀前田家表御納戸御道具目録帳』の分析を行った。調査は、蔵帳に記録されている茶道具の器種、推定生産地、状態、その他について行い、大名家が所有している茶道具に貿易陶磁器がどのような状態であったかをデータ化した。

茶会記

研究協力者の下村奈穂子、鈴木裕子が、小堀遠州、片桐石州、伊達綱村、酒井宗雅、松平不昧、井伊直弼の茶会について、日時、場所、席主、使用した茶道具などのデータ化を行った。

儀礼

研究協力者の原史彦が、象徴的な武家儀礼である將軍御成を例に、部屋飾りや茶事に使われた貿易陶磁器の調査とその意味についての考察を行った。

陶磁器生産

17~19世紀の陶磁器流通を考える上で、重要な生産地は、景德鎮、漳州窯、徳化窯を含めた福建・広東諸窯である。これらの窯の当該時期の発掘調査例は僅少で、具体的な様相把握が難しい状況にある。

景德鎮窯については、2012年2月に現地に行き調査を行った。福建・広東については、研究協力者の森達也に福建・広東・江西の清朝磁器生産についての情報をいただいた。

陶磁器流通

台湾、琉球は、日本および東アジアの陶磁器ネットワークを考える上で重要な消費地である。琉球へは2011年11月と2013年3月、台湾へは2012年8月に調査を行った。

また、長崎、平戸は江戸時代の日本の対外貿易港であり、その出土様相は流通を復元する上で大きな手がかりとなる。2012年

3月に調査を行った。

4. 研究成果

作成した報告書集成調査資料集および収蔵庫資料調査の成果を踏まえて、そこから窺える傾向を、地域別様相(江戸城・大名屋敷・下級武家地、町地、寺社地)、年代別様相(明末以前、明末清初、清朝)の把握とその需要の背景について考えるにあたり、武家儀礼、茶会記、蔵帳、生産地など近接する学問分野との研究協力を行ない、以下のような成果を得た。

(1) 地域ごとの様相

江戸城、尾張藩、加賀藩、仙台藩、淀藩などは、17世紀には多量に貿易陶磁器が出土しており、將軍家をはじめとする大名家には多くの貿易陶磁器を所有、使用している状況が改めて確認された(水本報告、内野報告、鈴木報告、宮澤報告、武内報告)。その形態は、数多くの揃いの皿や鉢を主体として、武家儀礼用としての所有が推定され、象徴的な遺構が江戸城跡汐見多聞櫓台石垣地点、汐留遺跡 5G-598、東京大学構内遺跡医学部附属病院中央診療棟地点 L32-1などがある。これらの中には、同時代の貿易陶磁器に伴って16世紀以前に遡る龍泉窯の青磁、景德鎮窯の青花などが大型製品を中心に一定量含まれていることも確認できた。また、丸の内三丁目遺跡や近年調査された有楽町一丁目遺跡など規模のそれほど大きな藩以外からも類似した遺物群が確認でき(収蔵庫調査、第6回勉強会)、所有の形態も使用者の単位やランクによって異なることが確認できたことも大きな収穫であった。特に江戸城からは、朝鮮王朝陶磁器の祭器や明初まで遡る青磁や青花が多く確認されていることなど、権力との関係が指摘できた(水本報告)。

これら食膳具とは別に茶陶として利用された貿易陶磁器も大名地から多く出土して

いることが指摘できる。象徴的な一括資料として、東京大学構内遺跡医学部附属病院看護師宿舍地点 SK299 であろう。ここからは中国建盞、龍泉窯香炉、同花入、高麗茶碗斗々屋茶碗、雲鶴筒茶碗。蕎麦茶碗、ベトナム白釉壺（水指）、ドイツライン炆器水注など茶の湯の道具が一括して出土している。ここで注目したいのは、これらの中に食膳具が含まれていないことである。この両者には異なる保管形態の存在が指摘される（宮澤報告）。また、祥瑞は日本から注文された茶陶として評価されているが、今回の集成で江戸城、加賀藩邸、仙台藩邸、武蔵岡部藩邸のみに限られ、非常に限定された所有であったことが明らかになった。

下級武士、町屋などからは、こうした状況は認められなかった一方、江戸時代後期になると規格性が高い磁器製品が多く出土している（長佐古報告、成田報告）。これらは景德鎮窯十錦手色絵碗、青花碗、青花散蓮華、徳化窯色絵碗、青花薬瓶などで、碗は喫茶（煎茶）としての用途が推定されるものである。この中で景德鎮窯十錦手色絵碗は大名や旗本地からの出土が多く、徳化窯色絵碗は御家人や町地などからの出土頻度が高い。これら使用階層と製品の相関関係が確認されたことも大きな収穫であった。

こうした需要に応じた消費とは別に長崎奉行に任じられた屋敷からは、17 世紀後葉～18 世紀前葉の清朝磁器、オランダのファイアンス、ベトナムの焼締め甕などの貿易陶磁器の他に柿右衛門色絵、ガラス杯など他遺跡からは確認できない遺物が多く出土している。鍋島なども同様であろうが、一般的な商品流通とは異なるモノの動きとして評価できた（中野報告）。

上記、江戸における 17 世紀と江戸後期の貿易陶磁器出土器種や分布の違いは明確であり、使用目的、使用階層が異なっている

状況が看取された。

（2）年代別様相

大きく 17 世紀前葉～中葉と 18 世紀後葉以降に貿易陶磁器の出土ピークがあることは、前述した。その間にあたる 17 世紀後葉～18 世紀中葉に比定される資料は、今回の集成では、長崎奉行所関連遺跡から少量の康熙年間（1661～1722）に生産されたと推定される青花などが上げられるに過ぎず、この段階には一般商品ルートでの陶磁器流通がなくなっているかそれに近い状況であったことが考えられる。

17 世紀前半、明末期の貿易陶磁器は、碗、皿、坏、鉢などの食膳具と茶陶が確認できる。推定生産地は、中国景德鎮窯、漳州窯、龍泉窯、朝鮮、ベトナム、オランダ、ドイツなどであり、その出土（需要）は上級武家地に偏りを見せている。この中には先述のように大型製品の青磁や青花が一定量含まれており、武家儀礼の中で使用される道具類の様相が明らかになった（堀内報告、杉谷・高島報告）。その後こうした貿易磁器需要は、17 世紀後半には中国国内の動乱による輸入途絶や肥前磁器の普及などから急激に減少し、肥前に替わっていく。

18 世紀後葉以降の貿易陶磁器は、先述のように小碗、散蓮華、薬瓶など器種や装飾が偏っており、規格性が高い（長佐古報告）。

（1）地域別様相を参照されたい。

（3）需要の背景

貿易陶磁器需要の背景として、17 世紀に顕著な武家儀礼の道具、大名などが所有する茶陶などの御道具類とその用途について記録を調査し、それらの様相と変化についての研究を行った。中世「唐物」と称される中国陶磁器は威信財として評価され、その所有と使用は室町將軍家を頂点として地方への拡がりを見せていたが、象徴的な儀

式である將軍御成の分析から近世においては中世的室礼の受容・継承と近世の中で和物指向から変化が伺え、後期には御成略式化から道具の縛りがなくなった（原報告）と指摘、貿易陶磁器の評価の変化がある反面、大名物、名物など新たな価値基準も生じたことが研究成果としてあげられる。

茶会記では、「朝鮮」、「南京」、「吳州赤絵」、「吳州染付」、「きぬた」、「七官渡」、「安南」、「祥瑞」、「古染付」などの文字が見られ、高い頻度で貿易陶磁器が利用されていることが確認された（下村・鈴木報告）。分析の対象とした茶会は茶人として著名な大名であるが、江戸において行われた武家の茶会においても確認できた意義は、貿易陶磁器の所有形態を考える上で重要である。

『加賀前田家表御納戸御道具目録帳』は、加賀藩が所蔵している御道具が記載されており、幕末の表道具の様相が復元できる。ここには揃いの食膳具などの記載はなく、藩邸出土貿易陶磁器の主体的様相とは異なった内容を示している。大名藩邸に存在していた貿易陶磁器の使用・管理は、食膳具、表御道具など多様で複合的であることが確認できた。

また、中世以来の指南書・評価書である『君台観左右帳記』とも基本的な評価は大きく異ならないことも確認できた。一方、国物、嶋物、南蛮物といった近世の新しい陶磁器も出土事例や目録帳の中からも確認できたことは、新しい時代の価値観が形成されたと評価できた。

（４）生産と流通

・研究報告 16 森 達也（愛知県陶磁美術館）

東アジアとの関係を復元するために江戸の様相把握の一方、中継地である長崎・平戸の様相、本土とは異なる様相を示してい

る琉球や台湾の流通状況などとともに中国の生産地の状況を調査した結果、陶磁器生産の有無や生産の質、量あるいは消費需要に応じた流通・消費ブロックが形成されたことが推定された。

○中国ブロック：中国は、それ以前から国外に陶磁器を輸出していた国であり、磁器陶器ともに国内生産で国内需要を充当できる地域である。

○東南アジアブロック：台湾、フィリピン、ベトナム、タイ、インドネシアなどは、近世に自国で磁器生産を行っていないため、食膳具に使用する磁器を主に中国から輸入している。

○日本ブロック：17世紀初頭に自国で磁器生産が開始された事によって、近世期に東南アジアブロックから変化する。日本は、おおむね自国で陶器・磁器の生産・供給が行われていた自給自足の地域である。このなかで、中国が国内の内乱により輸出が停止していた時期は、日本から東南アジアへ磁器輸出しており、陶磁器ブロックは異なる構造をしていた。

こうしたブロックは、流動的であり、生産・流通構造のみならず明末の私貿易の拡大、王朝交代の動乱、肥前磁器の台頭など社会、文化、経済状況によって変化するものと考えられる。

このように日本の陶磁器流通の様相を考える際には、東アジア的視点から陶磁器流通は評価される側面を持つべきで、例えば清朝期の景德鎮窯製品の質的な幅は広く、多地域、多階層の受容に応じた生産をしていることが指摘された（森報告）。また、判別ができないほどこれに類似した製品が、福建・広東諸窯でも確認されており、このあたりの問題も流通を考える際には課題となる。

また、日本の内地では江戸で代表されるような消費動向が想定できるが、全く異な

る地域として琉球があり、このネットワークの復元には隣接する台湾の状況を明らかにする必要がある。これも今後の課題としたいが、台湾の調査では多くの琉球と類似した陶磁器が確認された。

(5) 勉強会、報告会、報告書など

上記、3年間の調査・研究の成果として、以下のことを行った。

勉強会の開催

第1回 2012/4/15、第2回 2012/7/29、第3回 2012/11/4、第4回 2013/3/24、第5回 2013/07/20

第6回 2013/12/21 武蔵文化財研究所

報告書の作成

研究成果として、『「近世都市江戸の貿易陶磁器 調査・研究報告書」』を刊行した。(近世貿易陶磁器調査・研究グループ 2013)

資料集の作成

調査成果として、『近世都市江戸の貿易陶磁器 資料集(1)』を刊行した。(近世貿易陶磁器調査・研究グループ 2013)

報告会の開催

2013年9月28、29日、青山学院大学にて日本貿易陶磁研究会と共同開催で、第34回日本貿易陶磁研究会研究集会の場で研究報告会を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

・堀内秀樹 2013 「加賀藩邸の貿易陶磁器出土様相と「蔵帳」に記された陶磁器 - 『加賀前田家表御納戸御道具目録帳』を中心として - 」日本貿易陶磁研究会

〔学会発表〕(計2件)

・堀内秀樹 2012 「蔵帳に書かれるもの、書かれないもの - 加賀藩邸出土貿易陶磁器の諸相に照射して - 」日本貿易陶磁研

研究会第33回研究集会

・堀内秀樹 2013 「基調報告『近世都市江戸の貿易陶磁器』」日本貿易陶磁研究会第34回研究集会

〔図書〕(計2件)

・『近世都市江戸の貿易陶磁器 調査・研究報告書』近世貿易陶磁器調査・研究グループ 2013
・『近世都市江戸の貿易陶磁器 資料集(1)』近世貿易陶磁器調査・研究グループ 2013

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀内秀樹()

研究者番号: 30173618

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: